

所長在任の頃の思い出

京都大学名誉教授 中 島 暢太郎

私が防災研究所の教授に赴任してきたのは研究所が15歳の頃でしたが、以後20年在籍し、退職してから早くも15年が経ち、今年は創立50周年を迎えると聞き、歴史の重みを感じます。ここでは、私が所長をつとめた昭和52年5月から54年4月までの2年間の思い出を綴り、50年史の一端を埋めたいと思います。

所長就任は京都大学評議員を兼ねることにもなり、大学全体の管理にもたずさわることになります。4月のある日に突然岡本道雄総長から官舎に来るようと言われ、何かと行ってみると、「今京都大学は竹本助手の処分問題の審議中であり、今までの審議経過をよく理解してから評議会に加わるように」と詳しく説明があり、評議会が重大な時期にきていることを知りました。それから2年間の評議会は議論も緊迫したものでありましたが、学生などからの外圧も激しく、時計台の下の会議室で行われたことは殆どありませんでした。会議の場所は毎回未定で、ある時は北白川に見張りを置いて比叡山ホテルで開催したこともありました。会議が終わると資料は次回まで事務官が保管して、次回には前回までの膨大な資料をその日の会場までまとめて持参することになっていました。この数年間の事務官の苦労も大変なものでした。最終の結論を出す会議は学生側の要望で、時計台下で開催することになりましたが、会議室に通ずる廊下や階段はすべて学生が座り込み、一切手出しはしないという約束ではありましたが、野獣の檻の間を通るような感じでした。当時の評議員の中には学生と揉み合ってけがをしたり入院したりした人が数多く、研究室を学生に占拠されていた先生も多くありました。最後の評議会が終わった後安全なところまでバスで送るといのでどこまで送ってくれるのかと思ったら百万辺りまででした。大学の外は安全と知り奇異に感じました。所長の大事な仕事に予算編成があります。私の任期中で一番大きな仕事は水資源研究所の新設でした。降雨量が多すぎると洪水、土砂災害などの災害が起こるので、これらを防ぐために防災研究所がありますが、一方水資源の量と質の維持も重要であるとの理由で、かねてから水資源研究所の新設を、防災研究所を窓口として要求してきましたが、この審査が大詰めになったある夜、出張先の北海道のホテルへ文部省から連絡があり、「研究所の新設は駄目だが、防災研究所の一部門としての水資源センターなら認める」が今夜中に承知するかどうかの返事をせよとのことでした。所長在任中は夜でも連絡を受けられるように態勢はできていましたが、「水が多すぎると少ないのも同じ災害である」という考えを一夜のうちに決断するのは迷いがありました。石原教授や事務室と北海道から連絡して、夜のうちに文部省へ受諾の返事をしました。自分の専門でないことについても、所長としては自分の意見として自信をもって主張しなければならぬことがいくつもありました。地震予知と耐震設計とはどちらを優先すべきかも頭を悩ませました。従来の耐震構造研究部門を脆性構造耐震研究部門と塑性構造耐震研究部門に分離増設する時は、その理由を若林教授から何度も聞いて、それをさらに経理部長に、私から説明するのに苦勞しました。所長の任期中に多くの部門新設ができたのはよかったです。助手の定員がつかない不完全部門が増えたのは残念でした。宇治地区整備委員長になった時は絶えず広い地区内を歩き、建物の配置や緑化に心をくばりました。地区周辺の住民との間では、水質汚濁、騒音、光害の苦情の窓口ともなりました。事務室を通して付近のお地藏さんへお供えをするのも必要でした。北隣の自衛隊との付き合いも頭を悩ませました。学生が自衛隊に反対するので、先方も京大へ搬入する大型資材の通過を認めてくれないのです。一方京大の前の道路は地盤が弱く、重い車が通ると振動が激しく、住民の苦情が絶えませんでした。所長になるまでは、災害気候のことだけを考えればよかったです。所長になってからは広い視野を見る必要ができて、苦労も多かったけれども楽しく任期を終えることができ、関係した方々に感謝しています。